

令和6年度 第一回文学館協議会会議録

開催日時： 令和6年10月23日（水） 13：30～15：30

場 所： 山梨県立文学館研修室

出席者： 委 員：廣瀬孝嘉、大塚 茂、駒沢克昭、出澤忠利、仲田道弘、成富耕志、
長谷川千秋、矢崎茂男、山本久美子

事務局：(文学館) 三枝館長、和光副館長、天野次長、高室学芸幹、
保坂学芸課長、込山資料情報課長、北村総務担当リーダー、
中野学芸担当リーダー、野呂瀬教育普及担当リーダー、
小林資料情報課リーダー

(指定管理者) SPS やまなし 支配人、副支配人

県観光文化・スポーツ部文化振興・文化財課：渡井総括課長補佐、田中主任

次 第

・開 会

・会長あいさつ

・館長あいさつ

・議事事項 1) 令和5年度事業報告について
2) 令和6年度事業報告及び予定について
3) その他

・閉 会

○事務局から審議事項について説明

会 長 　　ただ今の事務局からの説明について何かご意見、質問等ございますか。何かありましたらお願いをしたいと思います。

委 員 　　今のSPSさんが実施しているアンケートは資料のどこかにあるんですか。

会 長 　　どのようなアンケートかというご質問がございました。

指定管理者 　　申し訳ございません。本日はお示しいたしておりません。アンケート内容は後日送付させていただきますがよろしいでしょうか。

会 長 　　その他ございますか。

委 員 　　高室学芸幹からいろいろな方法で各事業の周知をしているとの話がありま

して、例えばチラシであるとか広報誌であるとか、ホームページとか、色々な方法で広報をしていると思うのですが、例えばアンケートの中で、チラシを見て参加したとか、広報誌を見て参加したとか、そういうふうなアンケートの集計というのはされていますでしょうか。

指定管理者　ただ今いただいたご質問ですけれども、展覧会に来られるきっかけについては、チラシやポスター、テレビCMですとか、広報誌、営業先の広報誌関係でどのくらい来ているかと、来館のきっかけについてアンケートの質問事項に記載しております。チラシ・ポスターを見て来られたという方が、実は一番多いです。今、皆さんスマホをお持ちだと思いますが、スマホというのは自分が知りたい情報というのはいっぱい届くと思うのです。例えば文学や俳句に興味のある方に俳句関係とか、そういう情報はいっぱい出てくるのですが、興味のない分野の情報はなかなか表示されません。一方で、ポスターとかチラシというのは、目に飛び込んできて、紙媒体そのものに関心をもってもらえれば、文学館ってこんなことやってるんだ、美術館こんなことやってるんだ、というような形で、アイキャッチとして情報を捉えてもらえると、私たちは分析しており、今後もチラシポスターというのは、有効な広報手段のひとつではないかと考えております。

委員　私、今は市の教育委員会に在籍してしまして、いろいろな事業をやるわけですよ。ところがなかなか人が集まらないんです。特にこの秋は。なぜかといいますと、市の教育委員会の方針で学校を通じたチラシの配付を中止して、学校からは、月に1回か2回、市のホームページにアップされている情報を見てくださいということを、保護者にスマホ経由でアナウンスをするという方法に変わったんです。その結果、今、私が担当している小さな講座、教室ですけれども、ひとつは親子向けの登山教室は申込みが2組だけです。去年は1日で定員が埋まってキャンセル待ちもいっぱいだったのに。もうひとつは物作り体験教室というのを今週から募集を始めたんですけれども、まだゼロです。去年は2日目で30組埋まったんです。

それで、今おっしゃったように、やっぱりアイキャッチって言うんですかね、紙を見てという周知の方法は、シンプルだけれどもやるべきだなと思います。なぜ教育委員会でしなくなったかという、例の学校の働き方改善です。教育委員会だけじゃなくいろいろなところから学校へチラシが届くわけです。いちいちチラシを配るのが大変だということもわかるんです。けれども、そこをなんとか少し時間を割いていただければなど。チラシが配布できないことによって子どもたちに自信を持って勧められる、有益なイベント開催情報の伝

達が絶たれてしまったんです。もうなす術がないんですよね。もういっぺん校長会に掛け合ってみるつもりでいますけれども、今、話を伺って安心しました。アイキャッチって大事だなと。そのことを強く教育委員会に話をしようと思います。

会 長 素晴らしいことをやっているんだけど、そのことが伝わらない。そして、親御さんたちが一緒に行ってみようとか、そういう声かけにならないという現実があるのかなあと、感じましたね。今のお話しを受けて。先生方に働きかけるといことは、働き方改革の点で無理なんですか。

委 員 窮状を説明しまして、チラシを配ってもらった結果、登山教室はたった2組だったのが3日間で3組増えましてね、なんとか予定の半分になったので実施はします。でも、もう一つの方はゼロなので、あさってチラシ配りをしようと思っています。やっぱりキャッチコピーとかが、視覚的にももっとも子どもたちに参加してみようという意欲をかき立てるような工夫をしないとね。

会 長 いろいろな努力をしないと集まらないのかな。

委 員 昨年の企画展「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」の企画は、やっぱり子どもたちの心を掴んで、これだけ集まってくれたっていうのは、子どもの感性というか、興味に大きく触れたんでしょう。チラシの効果であると思う。というのは、ホームページの方はスマホでいくら見てくれと言っても、それは親経由で、親がスルーしてしまえば子どもに情報は行かないですもん。まず子どもがそういったものを見て、あれ行きたいなということが伝われば、親もそれで動くと思うので、このことは参考になりました。

会 長 「ふしぎ駄菓子屋銭天堂」も親子が一緒に楽しむような企画だったから良かったですね。人数も増えたし、楽しかったという記憶があります。館長の話ではないけれども、入場数だけの問題ではなくて、見た方の数が少なくても、どのくらい心に届いてお帰りになったかということがもっと大事なのかなというふうにも思いますが、そういう企画をいつもやってるように思うんですかね。ちょうどマスコミで流れている源氏物語に合わせてやるとか、そういう感じのところで、その時の流れに沿うようなところがあるので、そんなものを利用しながらやっていくのがいいのかなと。そうは言いながら、文学館には文学館の考え方や理念でやっていかなければならないというようなことも、片方であると思いますが、そういうせめぎ合いの中で、上手く調整しながら、

人を寄せるものと、そうでないものが、両方あるような感じの展示があってもいいかなというふうに思いますが、どうでしょうか。

委員 今のお話を伺っていながらちょっと思ったことなんですが、その特別展であつたり、展示を見ていただきたい対象者ですね、展示ごとに対象者が違ってくるのかなと。「ふしぎ駄菓子屋銭天堂展」であれば、これは子どもさんを中心にそのご家族の方々が来場するであろうし、もしかしたら、高校生、学生さんたちも興味を持っている可能性がある。それから「文学はおいしい展」などは、昨日たまたま学生としゃべっていたら、「私それ行きました、すごい楽しかったです。」なんて言っている学生がおりまして、多分学生はこのチラシをどこかで見て、心に響いて行ってみようと思ったんだろうと思います。

一方、「中村星湖展」は、少し文学に詳しい方々が対象になるのかなあというふうに思いますので、チラシを撒く対象を、展示ごとにちょっと変えてみたらどうか、通常撒く対象があると思うんですけども、それに加えて、中村星湖展であつたり、今開催されている「金子兜太展」のようなものは、研究者、大学、そういったところにも撒いたり、それから全国の文学館において、比較的関東辺りであれば、山梨に来たついでに来るといえることがあると思いますので、そんなふうに対象に合わせてチラシを撒くということも考える。それから紙のチラシは本当にいいんですけど、機関によってはデーターでいただいた方が有難いところもあつたりもします。どんなふうにはチラシを撒いていくかっていう広報手段を考えてみるといいかなと思います。

会長 具体的なご提案がございました。

委員 今回の資料もよく作られていて、皆さん大変だったなあということを感じました。これがまず大事、ありがとうございました。よく作られた資料だと思います。

過去データーを見ながら感じるのは、今回の「ふしぎ駄菓子屋銭天堂展」もそうですけれども、マスコミと絡んでいるということがありました。「村岡花子展」の場合もそうでした。そうしますと動員数が全然違います。それはこれからの参考になるのではないかと感じます。特に「ふしぎ駄菓子屋銭天堂展」の場合は、私もお邪魔したんですけども、観覧者が多かったのは、努力して学校を廻ったんだよね、ここがすごく大きかったと感じました。学校関係にも相当手を掛けたかなと感じました。広報は先ほどちょっと話がございましたけれども、ターゲット別の選択をしないと経費ばかりかかってどうしようもない。それを考えるべきだと思います。先ほどチラシをデーターで流す

というお話しがありましたが、もしよろしければちょっと教えてください。うちのほうでもそれを利用させていただきたいと思います。やはり企画というのは大事なもので、先ほど館長が言われたような専門性が高い内容の展示は、専門性が高くなれば高くなるほど、一般の人が中々それに近づくのは厳しいという傾向があるので、なんかその辺を砕いてから戦略を立てていただくといいかなと、専門家でない人たちにどういうふうに来てもらうのがいいか、そういうことがアプローチの企画の中では必要じゃないかなと、そんなことを感じました。

会 長 上手く出会いのきっかけを作れたらいいですね。いろんな意味で。資料からも、年間を通して多角的な経営をしている状況が読みとれますので、統計的に見てみると、子どもや家族を巻き込んだ企画、テレビの話題作や、他館とのタイアップした企画、こういうところに人が集まってきます。デジタルアーカイブの解説だとか、やまなし文学賞の応募と表彰をする。文学創作教室を開く。ZINEフェスティバルをするなど、いろいろな展開をしていますが、頑張っているなあと、それぞれターゲットが違うんだらうけれども、子どもたちも増えているような気もします。ZINE フェスティバルなんか、学校も増えているような感じもいたしますので、上手く呼び込めるかなあと思うんですがどうですかね。

委 員 今、ターゲットの話が色々出ましたけれども、実際に県内の人とか、県外の人とか、あるいは子どもと大人とか、男性と女性とか、そういう資料はあるんですか。

指定管理者 例えば、今回の展覧会は、女性が多かったということが分かるような資料はございます。また、先ほどのターゲットということで、お話しがありましたが、広報会議を毎回開催しておりまして、館としてどういうターゲットであるという方向性を示して、広報活動を展開しております。

委 員 ざくっと言って県内の人と県外の人は何対何です？

指定管理者 展覧会によってちょっと違いますが、常設展は大体 6 対 4 で県外の人が多いです。特設展、企画展なども、ものによってですけども、例えば今回の「ふしぎ駄菓子屋銭天堂展」などはほぼ県内の方というような形で、お子さんたちを連れて来られた方が多いと思います。

委員 文学館がですね、美術館もそうですけれども、何年か前に、県のいわゆる観光セクションの中に入ったんです。ですから、もうちょっと観光客、県外の人に対して想定した企画、コンテンツ、これを考えないと、せっかく観光部に入っても観光のこと知らないっていうことになりますんで、文学は図書館でいいという話に多分繋がっていくと思うんですよね。何年かこういうふうなことをしていれば。ですからコンテンツの、企画展の中身自体を、これで人を、観光客を呼べるのかどうか検討する、考えるということが、非常に重要になってくると思うんですよね。ですからコンテンツを決める段階から SPS さんも一緒に考えていかないと、県の学芸員さんの方で決めて、後、PR 頼みますってことだったら、いくら PR しても今回のような 1 日 50 人ぐらいしか人が来ないというような結果に繋がってしまうと思うんですよね。ですから、例えば観光でいうと、インバウンド、今、富士山の方にこんなにたくさん来ていて、じゃあ太宰とか芥川とか全部英語で見せられるようなコンテンツとか、そういうようなターゲットを絞って新たな展開を今していかなきゃいけない。それにはやっぱりアンケートの結果が一番大事で、そこからあなたが PR の担当です、あなたが展示会をやる担当ですじゃなくって、ぜひそこは一体になってやらないと、県外の人には呼べませんよね。間違っちゃいけないんですけども、文学館は県内の子どものためのためだけにあるわけじゃないんです。文学館を集客施設として、山梨の文化を観光の資源として活用するっていうことをぜひ考えていただきたいと思います。

会長 観光面からも、考え方を広くしていただきました。
他に何かありますか。あるいはこれに対してご意見等ございましたら。いかがでしょうか。

和光副館長 先ほど委員からご意見がありましたとおり、文学館を含めまして博物館の役割というのが、近年大きく変わってきております。文化観光推進法という法律が令和 2 年に制定されまして、その時に、山梨県では、博物館施設を教育委員会から観光・文化スポーツ部へ移管しました。文化の振興を起点とした観光振興や地域活性化によって、経済的価値や社会的価値を高め、それがさらなる文化の振興につながるような好循環を創出していくといった狙いがあります。また、令和 5 年には改正博物館法が施行されまして、博物館の事業として文化観光に取り組むことで、地域の活性化に寄与するということが、博物館としての役割に加えられました。ご指摘がありましたとおり、県内の方だけではなくて、この文学館が、隣にあります美術館も含めまして、こうした文化資源、文化拠点を活用して県外からの観光客を呼び込めるよう、取り組んでいかなければ

ればというところは、承知しているところですので、今後そういう視点を持って取り組んでいきたいと考えております。

会 長 私どもも、美術館があったり、ここに文学館があったり、県民の誇りうる施設ですよ。そういうようなものを県外の人にも見てもらいたいという気持ちが非常に大きいと思います。ただそれをどういう形で呼び込んでくるとか、そういうところが難しいと思いますね。いい企画をしてると思います。そこにいい企画を呼び込むだけの、そのきっかけを作る、それは文学館あるいは美術館そのものがやるというよりも、周りがそういうふうを持っていかないと、なかなかそうはいかないんじゃないかと思いますが、いかがでしょうか。

委 員 私はそうじゃないと思うんですよ。そうではない。美術館、文学館自体が人を集めるようにしないといけない。コンテンツから考えないといけない、ということは今、話をしたんです。

会 長 美術館あるいは文学館そのものも、そういう視点でものを考えるようにしたほうがいいと、いうご意見ですね。

委 員 これはちょっと情報ですが、実は今年の12月22日にうちの主催するクリスマス関連のイベントで、ここの文学館の講堂を使いまして、アナウンサーによる朗読会と音楽のイベントを展開します。これまで文学館の方では音楽系のイベントには施設を使用できなかったのですが、(演奏の内容によっては音楽の催しが)できるようになったということで、じゃあ一回イベントをやってみようかなということで開催するんですけども、今までの常設展とか特別展というもので人を集めるということプラス、定期的にイベントなんかを展開しながら一般の方に足を向けてもらおうとする、コンサートなんかを見た後ついでに、展示を観て帰ろうとかですね、そういった意味では裾野が広がってくるんじゃないかなと思うんですよ。ですからできるだけ、展示だけに限らず、講堂のイベントなんかを使いながらの展開なんかも有効ではないかなと思いますので、我々も12月にイベントをやってみてですね、その時の状況なんかもちょっと検証してみようかなと思いますけれども、一応そんなこともあるんじゃないかなという意見です。

会 長 施設そのものを上手く利用できるような、そういうことも必要ですよ。せっかくいい施設があって、それをみんなでどう利用できるか。

- 委員 山梨県書店商業組合の理事長をやっております。
- 館長の挨拶の中で、金子兜太展の入館者数が少ないことから、それを受けて協議がこのように始まっていると思うんですが、専門性に偏りすぎているのではないかという話がありました。
- 政府の骨太方針に「書店と図書館等の連携促進等を含む文字活字文化の振興」及び「書店の活性化」が盛り込まれていて、パブリックコメントをまとめているわけですが、図書館が入館者数によって評価されてしまっている。そのためにいわゆる貸し出し数は、漫画を置くとか、ベストセラー、そういったものを据えることによって増やしていく。そうしたアンケートの意見に応えすぎて図書館が本来の意義を失っているのではないか。実際図書館というものは、決して貸本屋ではなくて調査研究をするためにある。そのためにできた。しかしながら、今は本屋になってしまっているんじゃないか。そういう話なんです。そう思うと、この単なる入館者数という分かりやすい指標を使いすぎてしまうと、本来の文学館の意義、意味がなくなってしまうのではないか。全国に公立の文学館は非常に少ないです。公立だからできる、お金も使える、専門性であるとか、資料収集であるとか、そういったものをやっぱり失ってはいないだろうか。そもそもですね、なんで文学館が観光事業に入ってしまうのか、そうなるやっばり、どうしても先ほどおっしゃったように、入館者数を事業効果測定の指標としてしまい、入館者数を増やすための取り組みに偏ることになるが本当に文学館はそれでいいのか。そうなるやっばり専門性とか、山梨県にしかない資料と使った研究のために県外の人たちが来る。そのようなものにしていかないと、入館者数に囚われてしまうと本来の意義がなくなってしまうと私は思います。
- 会長 今の話をうかがっていますと、時代性といいますか、そういうふうなものを感じますね。本を読んで、いろいろなことを考えて、そして自分の生き方や信条に生かしていく、そういうことも大事。また、世の中の関心事や流行に刺激や影響を受け、タイムリーに世界の状況を理解することも良いこと。だから両方を上手くできるようにしていくことは、至難の業のような気がしますけども、その両方をやっていくことが必要だと思います。
- 委員 繰り返しになりますがけれども、そういうふうな研究活動をするために、お金がいますよね。そのためには、ここで稼がなきゃいけないです。もう県民の税金が入らないと思って、教育委員会の事業じゃないんで、そういうことを前提に、文学館とか美術館とかは、考えていかなきゃいけない時代になったということなんです。

国立国会図書館をはじめとして、そういうところはそういうところで行う資料の収集や研究とかそういうことは、私も否定は全然しないんですけども、そういう研究機関や施設が今後も継続していくためには、収入を得ることも大事です。そこで、お金を取って複写サービスをしたり、あるいはネットの使用料を取ったり、そういうことをしながら研究活動がされているということになっていると思うんですよね。大学もそういう時代になってきているので、たぶんそういう中で文学館も、研究活動をするためには、最低1日100人の人に来てもらいたいとか、そういうラインを決めてやるべきだと、私は思っております。

会 長 その他、何か意見はありますか。

和光副館長 委員の皆様のご意見を伺っていて、これは私の個人的な見解ではありますが、文学館の事業としては、展示は常設展、企画展、特設展があるということで、先ほど長谷川委員から「対象」というお話がありましたけれども、先ほどの「中村星湖展」のように、やはり調査研究をしてやるような展示があってもいいし、逆に委員がおっしゃられたように、この展示についてはターゲットを家族向けなのか、またはインバウンドとして、外国の方が来てもらう内容にするとか、そういうのがバランスよくあれば良いんじゃないかと。だから全部が全部、ただ入館者数を求めるだけだったらこれは本当に内容がないものになってしまう恐れもあるわけですから、そういうのを上手くバランスよくやって、文学館、文学というと敷居が高いイメージを持たれてますけれども、小さいお子さまにも来ていただいて、文学館というものに親しんでいただくということも大切なので、そういうのを考えながらバランスよく展示会をやっていく必要があるんじゃないかと感じました。

会 長 今、私は私学にいるんですが、私学と同じ考え方なのかなと。要するに自立経営をしながら、教育そのものも発展させていくというようなことです。公立にいるときは、本当に教育そのものを追究して、経営というようなことは二の次というような感じだったんですけども、今は、私学にいて、良い教育をしたいんだけど、その教育をするために、自分たちがその教育ができるだけの経営能力がなければできない、というところで、その経営と教育が両立できるような、バランスよく両立できるような在り方をどうするかということ、今考えているところです。だから同じような結論だと思います。国も、県もそう思っているのかな、というふうに感じています。いかがでしょうか。委員の皆様。

委員 話しがズレてしまったら恐縮ですけども、今、委員の先生方の話を伺いながら、そうだったのかということでもいろいろ考えておりました、観光面ですね、文学館にしても美術館にしても、いろいろしてるということを知りまして、そういうことがあるとすれば、もっともっと色々な展開を模索していかねばならんということを知った次第です。例えば、地方の、各市町村では、こういった施設を作ったときに、展示室でほぼ入れ替えてないんですね。作ったらずっと同じ。だけど、文学館の場合、毎年毎年いろんなものを入れ替えたり、企画を考えて、これ大変なことですよ。企画するだけでも大変だし、ものを集めて展示する、非常に大変な労力だろうと思うんですけども。

私、ひとつふと思い出したことがありますね、2006年の話です。当時、私が県のサッカー協会の少年委員会の委員長をやっていました。山梨県で関東大会をやったときの大会が終わった後です。各都県の委員長さんたちを連れて、ここに来たんです。美術館に行きたいというから。美術館に来てミレーを見て、文学館もあります、行きましようと言ったら、誰も行かない。なんで文学館だっているいろいろな展示があつて、という話しをしたんですけども、結局サッカーしか興味がないわけです。スポーツしか。そうであれば、誰かのスポーツ関係の作品展示とかがあれば、もしかしたら来たかも知れない。例えば、太宰治の小説「正義と微笑」は蹴球部（サッカー部）の学生が主人公です。だからそういったサッカーというスポーツだけでも、文学の展示にとって何か多角的に広がりはあるのかなというふうな気がします。

それからもう一つはですね、観光県でいうと山梨県は、ご存知のような長野県に次ぐ三大山岳観光の県ですよ。ですから大勢の登山者が一年を通して集まってきます。私は山岳関係団体の山梨県の理事をしまして、本当にたくさんの方が来るとですよ。そういう人たちの登山靴をこちらに向けるっていうね、それも1つの方策ではないですか。かつて百瀬舜太郎さんのコレクション展がございましたよね。それから足立源一郎さんの展示も。常設展示は難しいでしょうけども、こういったものが、この文学館に来ると勉強できる、研究できると、またそういう人たちとの対話にも繋がるという気もしました。観光という意味でお客さんを広めるという意味では、非常に切り口になるのではないかなと思ったしだいです。

会長 山梨が持っている観光資源といいますか、山岳あるいはサッカー熱、そういうものを利用して、そういう方々にここへ来ていただけるようなルートをどうやっていくか。そういうところにも意を用いていったらどうか、というご意見でした。

高室学芸幹 本日に色々な、今ご意見いただいて、私もいろいろ今までのことを振り返り、これからのこと、今現在のことを考えております。文学館も今年 35 周年と申しましたけれども、本当に世の中も大きく変化してきた時代であったと思います。文学も難しい状況ということも館長の言葉にありましたし、色々な表現の方法とか、その発信の在り方とか、メディアとか、いろいろなこと、状況が、大きい転換期を迎えている中で、その観光文化・スポーツ部にある博物館施設である文学館が、どういうところを考えていかなければいけないか、課題がもう全方向にあるなどと思っておりまして、副館長が申しました、いろんなところをバランスを取りながらというのは、実際私どもも考えながらやっている現状だなどと思っておりますが、そこを世の中の動きも見過ぎさないようにしつつ、足元もそして外の世界を見ながらということで、考えていきたいと思っております。

私ども学芸も、展覧会事業とか普及事業とか、考えていきます時に、子供さん、若い人にも来てもらえるような企画も欲しいなとか、あるいは、もしかしたら今、忘れられそうになっているかもしれない、名前さえ忘れかけられているかもしれない作家けれども、文学館の使命として、もう一度掘り起こしていきたいという、そういう考えで企画していく展覧会などもございます。一つの展示企画で全方向というのはなかなか難しいので、委員のご意見を伺いながら、その対象というか、目的と、その達成するための手段や作戦等をよりきっちりと、明確に、自分たちも意識して進めていくことは、もう少しまだまだやるべき余地があるなど思ったところでございます。貴重なご意見ありがとうございます。

会 長 ありがとうございます。その他何かございますか。

何か今日は本質的な意見のやり取りで、難しい時代の中で、文学館そのものが生き残っていく、その在り方みたいなことまでも、話されたような感じがいたします。色んな意味で、こう発想を変えて努力していかないとならないのかなと、思いました。非常に豊かな時代で、県立であれば、地道にやっていけばいいのかなというような時代ではなくて、県立であろうと国立であろうと、自分の力で、自立してやっていけるような、そういう施設になっていかなければならないという状況だと思えます。そのためにどんな工夫していくのか、ということが問われているのかなと感じました。

何かご意見ございますか。その他、なければこの件は終わりにして、その他がありますが、これだけは言うておこうと、何かございますか。

委 員 冒頭に館長の挨拶の中でですね、戦争に関する展示という言葉があったか

と思うんですけれども、来年戦後、終戦から 80 年、あと昭和が 100 年ということですね、何かその戦争とか昭和という時代に関する企画を何か考えられたらいいんじゃないかと感じております。

会 長 はい、その他ございますか。

三枝館長 実はですね、今のお話で、関連することですけれども、「金子兜太展」のオープニングの時に私が申し上げたことに繋がるので、ちょっと発言させていただきます。

「金子兜太展」では、金子兜太がどういう歩みをして、100 年近い生涯を経たかということ、これを通して昭和というのはどういう時代だったかということが、一つの典型として見えてくるのではないかと。そんなことで、昭和 100 年と金子兜太ということをお願いしたんですけれども。今から昭和 100 年というと実は私はいろいろなメディアでね、短歌を通して見る昭和 100 年、俳句を通して見る昭和 100 年、それだけではない例えば映画の 100 年。この間ある人に話しました。こんな企画をやれば良いじゃないかと。例えば吉永小百合を呼んで来て、「キューポラのある街」を語ってもらう。あの「キューポラのある街」の主人公を演じた吉永小百合が、あれを通して昭和というのをどう考えたかということをお話しいただくような、そんな企画をしたらどうかと、あっちこっちに言ってるんですが、そのような戦後 80 年、昭和 100 年に関係する企画を文学館で話題にするのを忘れていて、これから間に合うんだったらちょっと考えていきたいと思えます。ありがとうございました。

会 長 何か他にございますでしょうか。

なければ、非常にいろいろな意味で濃い会議だったと思えます。いろいろ考えさせられることがたくさんあったんじゃないかと思えます。委員の皆様には今後とも文学館に絶えず関心をお寄せいただき、それぞれご支援を賜れば幸いです。本日は貴重なご意見をいただきありがとうございます。以上で終わりたいと思えます。本当にありがとうございました。